

物語における記憶の変容に表れるコンプレックスの一考察

小 松 由 季

Jacob, M., Kast, V., Riedel, I. (1997/2002) は「メルヘンでは人間のファンタジーというより、精神生活そのものに対する無意識な、ユングによれば元型的なコントロールがはっきりと見られ」、「あるコンプレックスを徹底的に分析するのに成功したなら、即ち時の経過とともに同化された二次的要素を玉葱の皮のようにはいでいったなら、その核要素につきあたり、通例いわゆる「元型的内容」が正体を現すでしょう」(Meier, C. A., 1968/1996) と述べ、物語とコンプレックスに関係があることがわかる。さらに Diekman, H. (1978/1992) の研究より、子どもの頃重要な意味を持っていたおとぎ話は「改編された形でのみ、物語はその時々々に彼らに降りかかっていた問題をぴったり表わすことになったのだし、あるいは、自分を圧迫するようになっている問題が望んだように解決されるためには、改編した物語ではなくてはならなかった」ということがわかる。われわれの心に残っている物語は、改編された形で覚えていることで、自信の困難を乗り越えることができたのである。つまり改編された部分にこそ我々のコンプレックスが反映されていると考えられる。本研究では、コンプレックスを測定することのできる連想実験を用い、記憶されている物語の歪曲がその個人のコンプレックスにいかに関係されるか検討することを目的とする。

近畿圏内の成人男性 2 名、女性 11 名の計 13 名（平均年齢 29.2 歳）を対象に、まず心に残っている物語に関する質問紙調査を実施し、後日連想実験を行った。実際の内容と実験協力者の記憶している内容と異なる部分を『記憶された物語の内容の相違部分』とし、質問項目の物語の魅かれている部分に書かれているにも関わらず、内容として書かれていない部分を『実験協力者の記憶から欠落した部分』とした。上記の 2 点より得られた結果をもとに、コンプレックスに関連があると考えられるキーワードを抽出し、連想実験結果より、広瀬（2012）で挙げられたコンプレックス指標をもとに、コンプレックスと関係のあるいくつかの刺激語を取り上げた。その刺激語の内の一つから『記憶された物語の内容の相違部分』『実験協力者の記憶から欠落した部分』のキーワードが連想できれば、コンプレックスとの関連性が認められるとした。

分析結果より、心に残っている物語で記憶から欠落した部分とコンプレックスとの関係性は認められたといえるが、心に残っている物語の記憶された内容の相違部分にコンプレックスが関係しているという仮説は実験的に立証できなかった。『実験協力者の記憶から欠落した部分』はコンプレックスとの関連性が認められた要因として、そこには抑圧のメカニズムが働いていたことが考えられる。本研究は心に残っている物語とコンプレックスとの関連性をみるものであったが、自らの問題を乗り越えるために必要とされるのは、実験者と実験協力者の対話からコンプレックスの意識化を促すことが可能になる働きがけだと考えられる。